

文学教材の作品解釈と学習材としての分析

国語教育講座・氏名 三浦和尚

1. 授業の概要

この授業の位置づけは、国語科教育の基盤としての文章解釈力に見通しを立てるとともに、「文学的文章を学習材として捉え、分析する力を養う」ことである。これまで学生は、文学を楽しむ・学ぶという経験はしているが、それを教える視点から見た場合、従来の「作品解釈」とは異なる「学習者把握」に基づいた「学習材」としての分析が、国語学力観に基づいて行われなければならないことを自覚させたい。

そのため、

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの

池田澄子

春風や鬨志いだきて丘に立つ 高浜虚子

子を思ふ日ねもす捨菊見えてをり 石田波郷

の三句をもとに、学習材とは何か、学習材としての要件は何か、また、文学的学習材における作家の位置づけ等について考察した。

続いて、「走れメロス」を取り上げ、具体的に文学的な分析と、学習材としての位置づけを行い、文学研究と学習材研究が異なることを明示した。講義を軸に授業を展開したが、具体的な作品分析においては、学生相互の関わり合いを大切に、学習材としての分析の視点を強化するよう心がけた。

テキストとしては、『「読むこと」の再構築』（拙著）を用い、特に「読むこと」の今日的な課題を明らかにした。

まとめとして「文学的文章の文章分析」のあり方について講義するとともに、2月12日、愛媛大学附属高校において自身が行った研究授業を学生に提供した。学生は、授業後の研究協議まで参加するものがほとんどで、実際の授業を見て協議に参加するということが、貴重な経験となった。

研究授業概要は以下のとおりである。

- ①対象 愛媛大学附属高等学校 1年
- ②日時 2013年2月12日
- ③単元名 「蜜柑」（芥川龍之介）を読む

④指導のねらい

- ・豊かな文学世界の享受と言葉の力の獲得(説明略)
- ・読みの技能を背景に持つ発問(説明略)
- ・読解過程への書くことの導入(説明略)

⑤単元目標

- ・「私」の「小娘」へのまなざしから、「私」の人生についての見方をとらえる。
- ・主人公像の変化とその原因という視点から、作品の構造を明らかにする。

⑥指導計画

第1時 「蜜柑」を読み、感想を書く。

第2時(本時) 読みの課題を整理し、「娘の日記」の材料を確認する。

第3時 「娘の日記」を書く。

第4時 「私」の変化を読み取り、人物像を明らかにする。

⑦本時の指導

○本時の目標

〈価値目標〉主たるモチーフの「小娘」像を想像豊かにとらえる。

〈技能目標〉主人公像の変化とその原因という小説読解の筋道をとらえる。

○本時の展開<略>

2. 授業評価の方法

面談法と記述を中心としたアンケート法による。全受講者数は41名である。

3. 結果の概略と感想

今年度のテキストは、以前に使っていた『高等学校国語科学習指導研究』（拙著）が、具体的な実践中心のものだったのに比べ、どちらかというと実践理論に近いものだったために、講義が中心になった。そのため、「走れメロス」の具体的な教材分析や、最後の研究授業を位置づけることとなった。

結果として講義中心の内容となったが、授業展開の過程で、学生が書いたものを紹介したり、交換して相互評価させたりした。また、課題について話し合う機会は適宜持ったので、講義一辺倒と

ということにはなっていない。学生の反応の中にも、教材の分析についてグループで話し合ったことが面白かったというものがある。

以下に、いくつかの学生の評価を挙げる。

○この授業を受講して、私の国語の授業でどのように自分は授業を展開し、生徒に教えていけばいいのかという全く謎だった部分が少し開けたと思う。教える生徒の年齢や状況に合わせて何を教えていきたいのか考え、そのためにねらいを定めて工夫しながら指導方法を考えるという、口では言えるが実践するのは難しいこの問題を実際の経験談や指導方略、その他さまざまな資料を見ながら具体的に理解できたと思う。このような指導方法があると気づかされた時や、実際に国語の教員になった時にこのようなことをしてやろう、などと自分の中で考えることができたことも面白かった。

○この授業を受けて、私がそれまで持っていた国語教育に関する考え方が間違えていたことに気付かされた。その大きな気づきとして、文章の内容が理解できることが国語の力がついているというわけではないということがある。私自身の経験を振り返ってみても、評論文を読む際に、文章によって理解に大きな差があった。よく理解できていたのは、興味や知識がある内容だったからで、国語の力があつたから理解できていたわけではなかったのだと、この授業を受けて感じた。本当の国語の力とはなんなのか、どうすれば子供たちに国語の力を身に付けさせることができるのかということ、これからの大学生活、そして教師になった後も考えていかなければならないと思う。

○三浦先生は授業内で、今まで私たちが中学や高校で受けてきた授業が国語の能力を向上させるためにはあまりよくないものだったのではないかと、今の中学や高校の国語教育はこのままではいけないのではないか、と感じさせるようなことをいくつも投げかけてくださった。それまで自分が受けてきた国語の授業内容に対して、あまり深く考えたことがなかった私にとって、その発見が一番大きいものであった。三浦先生が「そのような授業を受けてきた生徒がいずれ指導者になり、また同じような授業をすることでそれは繰り返されていくのではないかと」といった話をされた時、まさに自分はそういう指導者になりかけていたのではないかと感じ、今のままではいけないことやそれを改善して少しでも良い国語の授業を作り出していきたいという感情を持つことができた。

具体的な知識・技能はともかく、今まで自分が受けてきた国語の授業を振り返り、教える立場から見直して、このままではいけない、本当の国語の力とは何なのか、何を教えればいいのか、少しわかったなどの感想は、「無自覚に教えられていた時分」を見直し、「教える自分のありよう」を考えるきっかけとなっていると思われる。一年生の後期という、専修決定後の初めの段階でこのような気づきや自覚があることは大変重要なことであると思われる。少なくとも教えるということについて揺さぶることはできているのではないかと。

また、今期の指導の目玉である附属高校における研究授業参観については、次のような感想がある。

○国語科教育法Ⅱの授業で普段話されている「変化」に着目したり、作品と自分をつなげている感想を取り上げたりと、教わっていたことの実践を見ることができ、授業内容をより具体的に理解することができました。前回の大学の授業で「授業らしくない授業になるだろうと思う」と聞いていて、実際授業を見ている間はそのように感じることもありましたが、その後、授業のねらいなどを聞いているとねらいに沿ったものであるように思いました。これからも大学でしっかりと学んでいかないといけないなと感じました。

○45分の授業がこんなにも短く感じたのは初めてだった。感想と本文を照らし合わせながら本文に入るなど、生徒の意見をもとに、うまく活かしていたのが印象的だった。後の研究会で、範読は必要か、文学の授業が古典の授業化しているのでは、などの指摘もあり、考えさせられたが、本当に貴重な時間になったと思う。このような機会をくださり、ありがとうございました。

大学の講義で伝えてきたことが、実際の授業を通して理解できたという感想は、実践力の育成に直接につながっていくものだと思う。

4. 今後の課題

今後はさらに学生相互のかかわりが生まれるように仕組んでいくと同時に、授業につながる実践的な内容に精選していきたい。

また、今回はたまたま実際の授業を参観させる機会が得られたが、これを継続できるかどうか、引き続き工夫していきたい。

結果として今回はシラバス通りには進んでいない。しかし、学習者の実態等に合わせて授業計画が変わっていくことは、教授学の原則であり、シラバス通りの授業を授業評価として求めることの無意味さは改めて指摘、確認しておく。